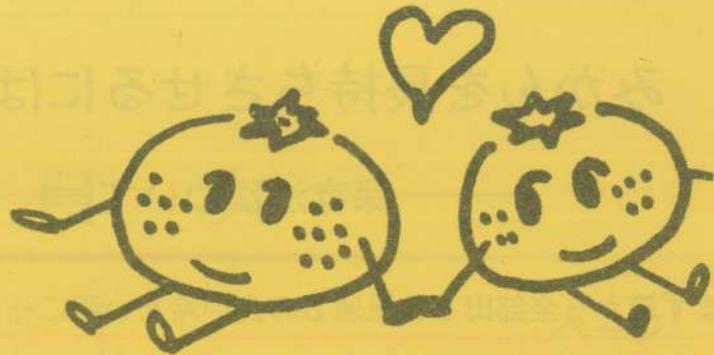
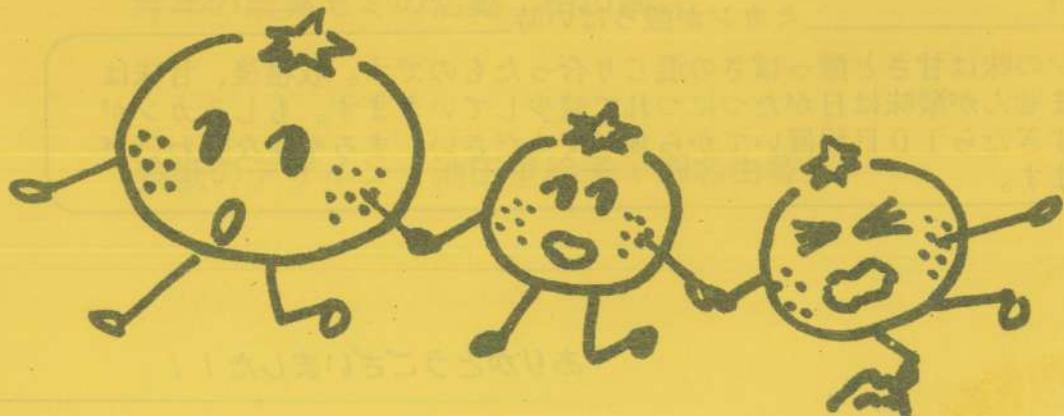


Vol. 8

1996年12月



News Letter



みかんを長持ちさせるには・・・

——保存法について——

1. まず箱から全部出し、風通しの良い冷たい所に十日ほど置いておく。



2. もう一度箱に詰めて、日陰で冷たい所に保存する。

3. なるべく悪くなりそうなものから早く食べること。
当たり前のことですが・・・・。

こうすれば2週間以上はもちます。
おいしいみかんを存分に味わってくださいね。

ミカンが酸っぱい時

ミカンの味は甘さと酸っぱさの混じり合ったものです。収穫後、甘味は変化しませんが酸味は日がたつにつれて減少していきます。もしミカンが酸っぱすぎたら10日程置いてから食べてください。まろやかな味わいが楽しめます。

ありがとうございました！！

目 次

	ページ
· REPORT (レポート)	
省農薬ミカンの歴史 石田紀郎	2
仲田さんへのインタビュー 伊集院克登・高杉晋一郎	3
報告書の紹介 白坂雅子	4
『省農薬ってなんだろうー省農薬ミカン園の現状報告会』についての報告 倉田尚子・宮川功	5
「省農薬ミカン栽培の可能性」出版記念パーティー 藤田美佳	8
農薬ゼミホームページの紹介 松田史生	12
コラム・ほだ木の話 相川創	13
· ESSAY (エッセイ)	
言うこと、すること 仁連木克典	14
私にとってのみかん山 原山浩介	15
ミカン山での1年 所啓子	16
もっと大人になりたいな 碓井彰子	16
みかん山の魅力～初心者編 森裕美	17
こたつとみかん 金沢英樹	18
最近思うこと（と編集後記）高杉晋一郎	18
今年の農薬ゼミの活動 相川創	19
表紙のデザイン 池田里絵子・蝦名由香	

省農薬ミカンの歴史

石田紀郎

今年の「省農薬ミカン」の味はいかがでしょうか。喜んでいただけるとうれしいのですが。このミカンは長い物語のすえにできあがりました。ミカンを食べながら、そのミカンの由来を知っていただければと思います。

今からもう30年も前になります。和歌山県海草郡下津町大窪というミカン産地の村で一人の青年が農薬中毒で死亡しました。松本悟くんという当時18才の青年が、両親とともにミカン園で殺虫剤を散布したことでした。両親は若き農業後継者である息子の死に際して、農薬に疑問を持ちました。そして、国と農薬会社が農民の安全確保義務と警告義務を怠っていたのが原因であり、責任があるとして、裁判に訴えました。この裁判の過程で、亡くなった悟くんの父親である松本武さんと叔父さんの仲田芳樹さんが、新しく開墾したミカン園で、農薬をなるべく省いてミカンを作りはじめました。

それから、25年間、このミカン園では農薬を可能な限り省いた農法でミカンが作られています。その間ずっと、このミカン園で発生する病害虫や雑草などの記録を、私たち農薬ゼミのメンバーが継続的に記録していました。省農薬で十分にミカンを生産できること、経済的にも成り立つことを証明することができ、この秋には『省農薬ミカン栽培の可能性』という報告書を出版しました。

普通に栽培されているミカン園では(これを慣行栽培園といいます)、1年間に十数回の農薬散布を実施しています。この農薬のおかげで、ミカンは病気や害虫による傷がひとつもないように美しく仕上げることができます。しかし、このきれいなミカ

ンの蔭には、農薬を撒く農民の農薬中毒や環境汚染、さらにはミカンへの農薬残留による人体への影響などさまざまな問題が発生してきました。しかし、見た目にきれいなミカンでなければ市場では相手にされないという現実の前に、農民は嫌々ながらも農薬を撒き続けているのが現状です。さりとて、今すぐ農薬を全廃することは生計を維持していかなければならないことを考えると、大変な危険をともないます。だから仲田さんたちは、なるべく農薬を省く努力をしながら、今日のような省農薬栽培を可能にしてきたのです。

ここでは、雑草を防除するための除草剤を年に1回程度撒くだけで、殺菌剤や殺虫剤などの農薬の使用を省いてきました。たとえば、ヤノネカイガラムシというミカンの大害虫がこの園でも発生します。この害虫が蔓延すると枝が枯れたり、ときには木全体が枯れてしまいます。そこで、1986年にこのカイガラムシの天敵であるヤノネキイロコバチとヤノネツヤコバチを園に放ち、この天敵で防除することを始めました。この天敵は両方とも1ミリにも満たない小さなハチです。農薬にはきわめて弱いので、このハチを守るために、病気を防ぐための殺菌剤の散布も中止してきました。こんな手当も功を奏したのか、ヤノネカイガラムシは激減し、今では見つけるのも困難なほどになっています。このカイガラムシ以外の害虫もずいぶん減少して、この数年は、害虫がいても被害が発生しない状態にまでなってきました。天敵のハチの効果なのか、それとも私たちが気付いていないような多くの生物が関与した結果なのか、わからない部分もたくさんありますが、いずれにしても殺虫剤を使う必要がないまでになりました。しかしながら、病気の方は相変わらず農薬以外の適当な防除方法が確立できず、お届けしましたミカンのように、表面が少々汚くなっているものもありま

す。しかし、これはミカンの味にはほとんど関係ありません。

このような長い年月にわたる試行錯誤によってこの省農薬ミカン園が成立するようになってきました。天敵が有効に働いてくれるようになるまでの間は、ヤノネカイガラムシがすべての木に発生し、木によっては枯死する寸前にまでなった時期もあります。その頃は天敵導入を提案した私達も胸が痛みました。しかし今では、安定したミカン園栽培が可能になりました。言葉では「省農薬」と簡単ですが、そんなに簡単にできるものではありませんでした。農薬の生産者、環境、消費者への害を防ぐ農業こそ本来の農業の在り方だという信念をもって栽培を続けてきた仲田さんという生産者がおられたことが、この省農薬ミカン栽培を可能としてきたと思います。私達もこの熱意をうけてこれまで調査と販売を続けてこられたのです。これからも、この園の成果が多くのミカン園に引き継がれ、多くの消費者の支えられた省農薬農業が全国的にひろがっていけばと願っています。

一朝一夕にはできない省農薬栽培を、私たち農薬ゼミのメンバーは研究者として、消費者として今後も支え、日本の農業が農薬禍から脱出できるように微力ながらもこの活動を継続していきたいと思っています。

最後に省農薬園をより理解していただくためにも、報告書『省農薬ミカン栽培の可能性』をお読みいただければ幸いです。

仲田さんへのインタビュー

伊集院克登・高杉晋一郎

秋の調査中の11月3日に伊集院・高杉がこの省農薬みかんを作っていました。仲田さんにインタビューしました。以下はその内容です。

・今年のみかんについて?

下方の慣行園ではものすごく不作やでえ。ところが調査園はどういうわけか良くできてる。味はまあまあの年やないやろか。特別においしい年というわけやない。

・今年の夏の天候について?

今年もやっぱり干ばつやった。日照は良かったけど雨が少なかった。その分、実は大きくならんけど、味のほうはのってる。

・害虫の減少について?

不思議やなあー。ヤノネ(カイガラムシ)は寄生蜂を放してから減っているが、ヤノネが減ると同時に他の害虫も減っている。どんな関係があるのかは分からん。初めのころはソウカ(病)にしてもルビロウ(カイガラムシ)にしてもひどかったでえ。今はソウカにしてもルビロウにしてもほとんどみいへん。今年は葉っぱにはソウカがあつても、果実のほうにはついてへん。夏に干ばつがあったからやな。ソウカは雨が多いと湿気によって伝染するんや。だから梅雨が長いとソウカがひどくなるんや。

・みかんの木の寿命について?

だいたい人間の一生と同じくらいやな。一人前の木になるのも人間と同じで20年や。20~30年くらいのころは毎年しっかり実がなるが、40年くらいになるとその年はようなっても次の年は多少目方が少ない。60年くらいになるとその年は普通になつても次の年はこつきりとならんのや。本当に人間の一生とよく似てる。調査園の木は苗

木で3年、育てて20年になるからもう23年になるんや。

・省農薬みかんを作ってきて今思っていること？

販売先をもっているんなら省農薬栽培をみんなに勧めてあげたいなあ。もっと広めたいなあ。ところが販売先がないんや。最近は加工用のみかんも基準が厳しいから、省農薬で作って売れんかったら加工用にならん。今まではどうしようもないみかんが加工用になっていたんやけど、最近はそうもいかん。省農薬で作って売り先がなかったら全部ほかさな（捨てなきゃ）ならんのや。

・これからやってみたいこと？

極早生品種やな。（調査園にも一本だけある。大量に苗を買ったときにたまたま混じってしまったもの。）調査園の木は一昨年くらい前までは極早生品種だとは分からんかった。というのも実がつかんかったからや。花のつく時期は極早生も興津早生も同じやのに、実のなる時期が違う。極早生は木についている時間が短いからやっぱり味はのらんのやけど、早く出荷できるのとあまり酸っぱくないことが消費者の方に喜ばれるんや。



報告書の紹介

白坂雅子

今年10月、省農薬園で長年行われてきた調査をまとめた報告書「省農薬ミカン栽培の可能性—病害虫被害解析と経済分析—」が出版されました。1973年に仲田芳樹さんにより、できるだけ農薬を減らしたミカン作りを目指して省農薬園が開かれ、その当時、*農薬裁判を通じて関わり合いのあった農薬ゼミのメンバーにより、1978年、省農薬園での病害虫の調査が始まりました。以来、18年間、農薬ゼミのメンバー、その他の人々により、夏（7月）と秋（11月）の年2回、病害虫の調査が行われ続けています。今回の報告書は、ゼミのメンバーである石田先生、浅井元朗さん、市岡孝朗さん、中川ユリ子さん、中屋敷均さんが、1980年から1991年までの12年間の調査について、結果の解析、考察をしたもので、省農薬園の土壌の特性、病害虫の発生状況、雑草の発生状況、果実の品位・品質についての調査といったミカン園の現状の解析だけでなく、天敵（寄生蜂）導入による害虫防除、クローバーによる雑草抑制といった試みも行っています。また、諸経費の分析、収量調査も行い、省農薬園の経済的な分析も行いました。内容はちょっと専門的ではありますが、省農薬園そのものが分かる一冊です。

ひとくちに18年と言いましたが、これは簡単な年月ではありません。ゼミのメンバーも次々と世代交代し、今までに調査に参加した人数は180名にものぼっています。少人数で始まった調査でしたが、先輩達の確立した調査方法はしっかりと現在まで受け継がれています。また、実験園ではなく、実際に農家が生計を立てているミカン園でこれだけの調査を行い、かつ農業収入も維持できてきたことだけでもすごいこ

とだと思います。今回の報告書はあくまで今までの調査をまとめたものであり、これから省農薬園がどうなっていくのかは分かりません。今後は、この報告書をどう利用していくか、またこのミカン園でこれから先どのようなことができるかを考えいくときだと思います。

農薬をどんどんまいてきれいなミカンを作ろうという時代に全くの手探りで始めた省農薬栽培でしたが、その成果がこのミカンなのです。仲田さん、松本さん、農薬ゼミ、ミカン山を訪れた人々、ミカンを買ってくれた人々が、この園を支えてきたのだと思います。このミカンとミカン園のこと、ゼミが今までミカン園でやってきたことについて、もう少し詳しく知りたいと思われた方、ぜひ、この報告書を読んでいただきたいと思います。

*農薬裁判：1967年、仲田さんの甥の松本悟さんが農薬（ニッソール）により中毒死。1969～1983年の17年にわたり、松本さん夫妻が、国と日本曹達株式会社を相手取って起こした民事訴訟。

報告書「省農薬ミカン栽培の可能性—病害虫被害解析と経済分析—」をご希望の場合、石田研究室宛（裏表紙を参照してください）にその旨を書いてお送りください。その場合、印刷費などの2000円のカンバをお願いします。

『省農薬ってなんだろう —省農薬ミカン園の現状 報告会』についての報告

倉田尚子・宮川功

「省農薬栽培の可能性」の原稿が完成した今年3月、ミカンを買ってくださっている皆さんに省農薬園で今まで行ってきた調査について報告しようということで農薬ゼミ有志による報告会を企画しました。報告会では、ミカン栽培に対する次の三つの疑問を提示し、報告書から、あるいはゼミの例会で勉強したことや、資料などをあたって出した私たちなりの解答を発表しました。当日は多くの方におこしいただき、ご意見などもお聞かせいただきました。以下に簡単にまとめます。

疑問1 なぜ現在のミカン栽培では農薬を大量に使う必要があるのか？

今でこそ手頃な冬の果物として売られているミカンですが、かつてはミカンが一籠分あれば一晩街で飲めたというくらい高価だった時代がありました。昭和30年代の、ミカンは作れば売れる、増やせ増やせの大増産の後、供給過剰となったミカンの価格は大暴落しました。ミカンであれば売れた時代から売れるミカン、すなわちおいしくて見栄えのよいミカンの時代へと移ったのです。さらに輸入オレンジとの競合によりミカン栽培を取りまく状況はより厳しいものとなりました。激しい産地間競争のなかでミカン農家は農薬を多用し、大きくて形が良く虫や病気の付いていないきれいな、品質、品位（見た目）の高いミカンを作るようになりました。一方では、無農薬や省農薬、有機栽培などの高品質化とは

別の価値でミカンを作っていくという流れもあります。例えば、ミカンに付いた虫をブラシでひとつひとつ払い落としていくというようなやり方できれいなミカンを生産するといった、農薬を使う代わりに手間をかけることに高い付加価値をつけて売り出す農家もありますが、仲田さんのミカン園はそれとは少し違っています。仲田さんのミカン園で行われている省農薬栽培は、農薬ができるだけ減らしていますが、土の管理や剪定、摘果等の作業は普通のミカン園と同じです。ミカンに小さいのや大きいのがあってもいいし、病気や虫の付いたあとがって少々デコボコしていてもいい、食べる人にとっても、作る人にとっても安全で、おいしいミカンが普通に受け入れられるようにならないか、と考えています。

疑問2 農薬を減らしたミカン栽培は可能なのか？

省農薬栽培を始めると決めたとき仲田さんが一番心配したのはできたミカンを買ってくれる人がいるのかという事だったそうです。ミカン園の経営が成り立つだけの収入を果たして省農薬ミカンで得られるのでしょうか？

普通の園が農薬を年に十数回撒くところを、除草剤や機械油（これがかかった虫は窒息死する）などを一回程度撒くだけに抑えて省農薬ミカン栽培は始まりました。初めの頃は病害虫に悩まされ大変だったようです。機械油さえ撒くのをやめた年には、ミカンの大害虫であるヤノネカイガラムシが大発生しました。枯れそうになった木もあるほどです。そこに天敵であるヤノネキイロコバチとヤノネツヤコバチ（ヤノネカイガラムシに寄生して殺してしまう。）を放してやるとヤノネカイガラムシは劇的に減少しました。この2つのコバチは農薬に弱いため普通のミカン栽培を行っている園

では見られないのですが、省農薬園ではこれらの活躍でヤノネカイガラムシの密度は低く保たれています。自然の仕組みをうまく利用した成功例です。農薬を使って害虫や病気を全滅させなくてもおいしいみかんは作れます。いつだったか、農薬を使って一般のミカン園に入ったゼミのメンバーが「しーんとしているね」と言ったことが印象に残っています。仲田さんの園には蜂もいるし、カエルもいるし、クモもいる。いろんな生き物が、病害虫さえもがバランスをとって存在しており、それがこの園に安定をもたらしているのかもしれない。ほかほか陽のあたるミカン園で思いました。

報告会の話に戻ります。省農薬栽培のデメリットは、病害虫が発生してミカンの見た目が悪くなること、さらに収穫量は約30パーセント下がることです。一方メリットは農薬の使用量が少ないので、生産費が安くすみ、農薬をなく労力も省けることです。収穫量の減少による収入の減りと、農薬を省くことによるコストの減少とそして流通方法の違いによるコストの差がつりあえば省農薬栽培は経済的にも可能だということになります。報告書によれば、仲田さんのミカン園では平均的なミカン農家と同じだけの収入は得られていませんでした。これを解消するには、新しい技術を考え出して収穫量を上げるか、売値を少し上げるかしなくてはなりません。現実的には今すぐ収穫量を上げることは無理ですから、今年はみかんの値上げを行いました。

疑問3 省農薬ミカンをどのような方法で売るべきなのか？

ところで、一般に有機農産物や省農薬農産物はふつうの農産物に比べて高くなっていることが多いようです。なぜでしょう？

これには2つの理由が考えられます。ひ

とつは流通のコストがかかるということです。省農薬、有機栽培等の農産物の販売の仕方では、栽培量の少ないものを遠くから運ばなくてはならないため流通のコストが割高になります。さらに何らかの団体を通して消費者と直接提携するような場合には、消費者によりきめ細かく配送しなければならないのでお金がかかります。大量の商品を並べてお客様が来るのを待つ店舗と、一人一人に配送する仲田さんのミカンでは流通にかかるコストの割合はかなり違ったものになります。例えば京都市内なら配達費を含めて2900円の仲田ミカンは、北海道や沖縄に宅配便で送ると4000円以上にもなってしまいます。このように有機農産物や省農薬農産物の価格には流通経費、とくに個人やグループへの配送代が大きな影響を与えています。

もうひとつの理由は付加価値です。無農薬、省農薬、有機などを農産物の付加価値として認め、価格に上乗せしているということです。この付加価値の基準というのも曖昧です。農水省は無農薬、省農薬、有機農産物に係わるガイドラインを設定していますが、例えば、減農薬と表示するときの農薬の使用量（これも、慣行農法の何割というものが曖昧）の基準はあっても、散布された時節は問題にされていませんし、そもそも、個々の農地にその年毎に必要とされる農薬の使い方が考えられているわけではありません。ですから、同じように減農薬農産物と書かれても、実際の所は本当に必要な農薬だけにしぼった減農薬かどうかは分からぬのです。「だけど実際のところ、農薬は少ないじゃないか」という声はあるかもしれません。しかし、私達が求めるものはそういう見かけの量の問題ではなくて、生産者にとっても消費者にとっても納得のいく農産物を作るために必要最小限だけ農薬を使いました、という言葉です。その言葉を信頼するかどうか判断しよ

うとするなら、「必要最小限ってなに？」とまず考え、そして実際に農作物はどうやって作られているのかなあというところに突き当たると思います。

農薬ゼミは20年にわたる調査を通じて仲田さんと関わってきました。いろいろ教えていただきながら一緒に作業をしたり、お話を聞いたり、お酒を飲んだりしてきました。仲田さんを通してミカン農業を直に見て考え、今回の報告書が出来上がりました。省農薬ミカンをどうやって売るべきかについてひとつの答えが出たわけではありませんが、仲田さんと、農薬ゼミと、ミカンを買ってくださる皆さんとの今のつながりを大切にしつつ、どうしていったらいいか考え続けたいと思います。



「省農薬ミカン栽培の可能性」出版記念パーティー

藤田美佳

去る10月5日、ミカン山の20年の調査報告書が出版されるのを記念してパーティーが開かれた。ミカン山に行ったことのある人、ミカン山を研究のフィールドとして大学時代を過ごした人、そして20年前農薬ゼミを始めた主要メンバーの面々……など60名を越すにぎやかなパーティーとなつた。落ちついた雰囲気のフランス家庭料理レストランでは、我らが父、石田氏と懇意のシェフさんがコック長を務められ、会を盛り上げた。各テーブルに今年の仲田さんのミカン2品種を添えたのはちょっとした演出だった。関東や北海道からはるばる京都へ駆けつけたゼミOBのメンバーも、口に広がるミカンの甘酸っぱさにそれぞれの農薬ゼミ時代へと思いを馳せたのだろう。仲田さんの祝辞をいたたく頃には同窓会のようになり、報告書著者の熱心な解説が終わるとわいわいがやがや懐かしい話は尽きなかつた。体調を崩されている松本さんにも、思い出のいっぱい詰まつた特製アルバムが用意されていた。わたしは晴れやかなこの企画の幹事として会場全体を眺めてみた。一人一人、人生の一時期（というほど大げさでもないが）を京都で、いやミカン山で過ごしたという共通点を持っていた。農薬のこと、農業のことなどミカン山と関わりながら一度は考えたことのある人達。そんな一人一人が、今は全国各地でそれぞの道を選びいったいどんなことを考えているのだろう。残念ながら直接話せる機会は持てなかつたが、記念文集から抜粋して、農薬ゼミOBの寄稿を紹介したい。

「省農薬ミカン栽培の可能性」の出版おめでとうございます。あいにく用事ができてしまい出席できませんが、若いメンバーが大勢でにぎやかなパーティーになつることでしょうね。

すっかりミカン山にもご無沙汰しています。ああ、秋の調査でミカン投げがしたいなあ。夏だって、暑くてしんどかったけど、わらのふかふかのベッドで寝るのはおつなもの。ミカンの花をまだ見たことがなくって、ぜひ一度、とずっと思っていたのに、まだかなわない。

わたしのここ数年の農薬ゼミとの関わりといえば、ミカンそのものとのつきあいくらい。冬のはじめにミカンが届くと、とりあえず広げた中で中位でしまつたのを選んでほおばって、「やっぱりミカン山のミカンが一番おいしい。」と、あの甘酸っぱいミカンに再び出会えた幸せを感じながら、石田先生の顔やら調査のことやらに思いをめぐらしたり。

ミカンが届いたらすぐに代金の支払いしなきゃいけないのに、だいたい支払いのファイルの中にいれたまましばらくあたためてしまう。そのうち留守電にミカン代の督促のメッセージが入ると、「ああまた今年もやっちゃった。ごめんなさい。」と思う。いつも支払いが遅くてごめんなさい。

2人暮らしでしかもあんまり家にいないので、1箱のミカンを春までゆっくり食べていく。二人で1箱というのは適量だと思う。春がやってくる頃に、乾燥してミカンがからんからんになってきてくる頃に食べ終わる。そんな感じ。

でも実際にはそううまくことが運ばない。毎週お世話になっている「ボラン広場の宅配」の野菜セット（選択の余地なく送られてくる1000円分の野菜・果物）の中にミカンがしばしば登場する。いつもはこち

らの食品にも感謝感謝で、野菜セットの意味もわかっているつもりだけれど、この時期だけは、「ああ、また今週もミカン…。」とため息。これが続くと、ミカンでわが家があふれてくることになる。一生懸命に食べるだけではとても追いつかない。お風呂なんかに入れたりもするけど、最近凝っているのは、ミカンジュース。コップ1杯のジュースを作るのに、4つはミカンが要る。単純に「てこ」の原理でミカンをおしつぶすイタリア製ジューサーを使う。（電動のジューサーだとビタミンが破壊されるが、これなら大丈夫らしい。）ミカンの繊維がちょっともつたいないなあとは思うけど、ジュースはジュースでやっぱりおいしい。シーズン初めはだいたいミカンそのものを食べるけれど、段々にジュースを頂く割合が増していく。そして、ミカンの季節が終わる。

どこの家庭でもある話ですね、失礼。

大学を出て、2つの会社勤めを経て、5年ほど前に「92国連ブラジル会議市民連絡会」（以下ブラ連）で約1年を過ごしました。ブラ連は、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開かれた「環境と開発に関する国連会議」にむけて、これに関心のある様々な日本の市民グループを結びつけ、行動を起こしていくこうというネットワークでした。（地球サミットの終わった後、このネットワークは、市民フォーラム2001という名前に変わって、現在も様々な活動を行っていると思います。）

その後、両親の小さな会計事務所で修行しています。大学でも何ら専門性を得ることなく、会社では何でも屋的に仕事をこなしていたので、ブラ連で様々な実際的な運動に関わっている人たちに接して、何一つ専門性を持たない自分がひどくはがゆく感じられたので、遅ればせながら手に職つけよう、と。（専門性を持たなくとも、人との

つながりや行動力や創造力によってすばらしい活動をしている人たちもいたけれど、わたしはそういうタイプではなさそう。）会計士補になって2年、来年3次試験に合格すれば晴れて公認会計士。勉強しなくっちゃ。

さて、会計の分野に身をおいて、この頃感じることといえば。

ブラ連での1年を通じて強く感じたことの一つは、もっと成熟した市民社会をめざすには、企業や自治体や市民グループなどあらゆるセクターの行動が適切であるよう市民がチェックすることができなきゃいけない、そのためには、情報公開をもっともと進めが必要不可欠だということでした。誰かが何かを隠している時は大抵ゆがみが生じているから。実際、最近では官官接待に関する情報などを市民グループなどが追求することで、自治体の問題点が浮かびあがってきたりしています。でも、長い時間をかけて作り上げられてきた企業の情報公開制度にくらべて、自治体の会計情報については公開の仕組みそのものが非合理的。企業なら貸借対照表を見れば、その企業の財産と債務の状況がどうなっているのか一目でわかるのに、自治体会計では、フロー（収支）を重視するあまり、ストックについての情報はほとんど開示されません。大企業であれば子会社の成績なども含めた連結決算を組むのでグループ全体の経営成績がわかるけれど、自治体ではいったん第三セクターに対して出資をしてしまえば、出資した第三セクターの企業がつぶれたとしてもほとんど認識されないので。

一方で、市民運動などでは、人手不足もあって適切な会計処理を行うというレベルに達していない場合も多いし、そのせいか、市民運動に法人格を与える運動をしている「市民活動を支える制度を作る会C's」で話を聞いたところでは、会計情報の公開

について消極的なグループもあるらしい。みんなのポケットマネーならともかく、公的な資金や企業の資金も市民運動に流れ込んでいる現在、お金をきちんと管理して、使い方をきちんと報告するようなシステムを作つておかないと、将来信頼を失うだけだと思うんだけど。私の事務所では、一般企業及び公益法人・労働組合とおつきあいがあるだけで、自治体や市民運動とは今のところ関わりがないけれど、徐々にそのようなセクターの会計実務の構築にも関わっていきたいなあと思っています。

最近ため息がでるのは、税金のあり方。会計事務所にいると、国民の納税意欲のあまりの低さにしばしば愕然とする。よく感じられるのは、この程度の税金のがれをする人はたくさんいるから自分だっていいじゃないか、とか、巨悪が罰せられないで自分たちだけバカ正直に申告するなんて、といったニュアンスで、友人で国民の税金でお給料をもらっているくせに税金を払わないことを考えている奴もいる。納税は国民の3大義務の一つだなんて、そんなことは小学生でも知っていることなのに。たぶんこのような意識の低さの原因は、自分の納めた税金の使い道に対し不満が大きいということが大きいと思う。でも、そういう不満は別の形でぶつけるべきことで、税金はきちんと払わなくっちゃ。バラドクシカルだけれど、個人も法人も皆が正しく納税したならば、きっと所得税なり消費税の税率を低くできることができるだろうと思うんだけどな。

それと、税務行政に関わる人々の意識の低さにもあきれちゃう。税務調査をして、この会社は金があってちょっと弱みもある。そうだ、なんて思おうものなら、こんな話をもちだしてくるんだから。「お宅の会社で、今度退職するわが税務署長を顧問税理士としてお引き受け願えませんか。」会社の側には弱みがあるもんだからよっぽど意

志が強くなければ引き受けことになる。そうすると、税務調査の方は穩便に終了する、てわけ。業界の人たちは長いこと不愉快な思いをしながら口をつぐんでいたけれど、そろそろ口に出してもいいんじゃないかしら。税金を徴収する側のこと考えて、納める側のこと考えても、絶望的な気持ちになりますね。

新井直子（農薬ゼミOB；報告書出版記念文集より）

「現在の農学部の教育研究は、農学の全体像を見失っているのではないだろうか。全国各地で見られる農民の自主的再生の動きに対してもほとんど貢献していない。『農業が疎外された農学』のこの嘆かわしき現状に対して、農業を根本にした農学を追求しようと私たちがゼミを開始したのは4年前だった。」

これは農薬ゼミの最初の自主調査報告書の冒頭の言葉である。発行は1982年3月である。私はこの年の3月、大学を後にして就職し、あれから15年近い歳月が経過した。今年の8月に「みかん山報告書出版記念パーティー」の案内をもらった時は、正直言ってピンとこなかった。石田先生から改めて電話をいただいて初めて状況が把握できた次第である。

私たちが手探りで始めた農薬ゼミの活動が、1988年には石田先生の「ミカン山から省農薬だより」という本にまとまり、そして今、「省農薬ミカン栽培の可能性」という報告書にまとまった。「継続は力なり」という言葉があるが、まさにそのとおりである。

大学院生時代に土壌学を専攻していた私は、和歌山県の日置川町や奈良県の五条吉野で造成地土壌の成熟化過程の調査を実施しており、ミカン栽培農家や柿栽培農家と話をする機会には恵まれていたが、その一

方で専門分野の異なるものが集まって「専門分野を乗り越えた議論をし、農業を根本にした農学」を考える場を望んでいたのも事実であった。そんなことが背景にあって農薬ゼミの活動を開始したのである。

ミカン栽培の素人集団である私たち農薬ゼミのメンバーは、農薬化学、植物病理学、昆虫学、雑草学、土壤学、畜産学、食品工学及び農業経営学等それぞれの専門分野から「省農薬みかん園」の調査に参加した。

「省農薬ミカン園」に取り組み、私たちに調査の機会を与えてくださった松本さんと仲田さんには本当に心から感謝せずにはいられない。このミカン園がなかつたら、農薬ゼミの活動はフィールドを持たない「ただの勉強会」活動の域を出ることはできなかっただろう。共通のフィールドがあったからこそ、多くの仲間が参加し、今までゼミの活動が続いてきたのだと思う。私たちは、省農薬ミカン園で現場の農業を学び、自らの研究と農業との接点を模索することができたのである。

大学はバイテク花盛りの時代となり、1980年代後半頃から、「農学部」の看板を降ろす大学が出始めてきた。ある大学では、「生物資源学部」などという名前に変わってしまった。数年前、京都大学でも学部の改組が行われたが、「農学部」の看板はそのまま残され、辛うじて「最後の砦」は守られた。

1993年11月、京都大学農学部創立七十周年記念事業が行われたが、私は当時の農学部長であった久馬先生のあいさつに大変深い感銘を受けた。その内容は、農業の現場から余りにもかけ離れた農学部の教育研究のあり方を憂い、農業を根本にした農学を望むものであったが、農学部の多くの人が少しでも農業との関わりをもってくれればと思わずにはいられなかった。

私は愛知県で農業行政に携わっているが、極力「厳しい」という言葉は使わないようにしてきた。しかし、3年前のガット・ウルグアイラウンド合意等を踏まえて考えると、我が国農業は大変大きな転換期を迎えている。このような状況の中で、意欲のある農家が将来とも地域農業を中心的に担うことのできる農業構造を確立し、農村を活性化させることが求められている。あわせて、兼業農家及び生きがい農業を行う高齢農家の意向も十分尊重し、役割分担も明確化していくことが大切である。

かなり思い切った施策の展開と同時に、都市住民や消費者の農業に対する理解を深めていく取組みが必要であると考える。現実を見すえて施策を推進しないと担い手はいなくなってしまうのではないかと憂うるのである。

寄稿文を結ぶに当たって、今後とも、農薬ゼミが、そして松本さんと仲田さんの省農薬みかん園が農業と農学の関わりを考え、将来の日本の農業を考える仲間の輪となることを切に望むものである。

可知祐一郎（農薬ゼミOB；報告書出版記念文集より）

パーティーを終えて二次会、三次会がお開きになったのは夜中の2時近くだったという。最後までお付き合いいただいた仲田さん、お疲れさまでした。



農薬ゼミホームページの紹介

松田史生

い、ま、巷で大流行のインターネットですが、農薬ゼミもホームページを作成しました。アドレスは <http://dicc.kais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP/homepage.html> です。お近くのインターネットにつながったコンピューターでご覧ください。

農薬ゼミのページの内容は次のようなものです。

- ・今後のゼミの予定
毎週金曜日に行っているゼミやミカン園での調査などの予定です。
- ・農薬ゼミの過去の活動全記録
農薬ゼミの過去のゼミの記録です。記録にある事柄について、レジュメなど

くわしい資料が農薬ゼミに残っています。

- ・農薬コード（作成中）
和歌山県でのすべての農薬の出荷量のデータです。検索することができます。
- ・報告書「省農薬みかん栽培の可能性-病害虫被害解析と経済分析-」全文
出版された同報告書の完成ちょっと前版の全文を読むことができます。
- ・出版物
過去の NewsLetter や機関誌「興味のるっぽ」を読むことができます。

・農薬ゼミ紹介（作成中）
くわしい農薬ゼミの紹介です。

- ・関連ホームページのリンク
・石田研への地図
といった毎日の生活に欠くことのできない内容で皆様のご来訪をお待ちしております。

京農薬ゼミ



Kyoto Group for the Reduction of Agrochemical Pesticides
KGRAP

Tel & Fax: 075-753-6133
E-mail: kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp

農薬ゼミは、「農薬は減らせる」ということを、和歌山県下津町大窪のみかん園で実証している自主ゼミです。

このホームページでは私たちが十数年にわたって省農薬調査園で行ってきた調査の報告書「省農薬みかん栽培の可能性-病害虫被害解析と経済分析-」を公開しています。また、毎週行っているゼミの内容や定期刊行物なども読むことができます。

毎年12月の初めには省農薬ミカン園でできたミカンの販売もしています。このホームページからも注文することができます。

定例ゼミを毎週金曜日18:30より京都大学農学部N378にて行っています。気軽にご参加下さい。

省農薬ミカンの販売をします！

お届けは12月7日頃、一箱10kg 2400円、宅配もします。京都市内の方はゼミ員が配達します。

ほだ木の話

相川創

土 づくりは農業においてとても大切なことです。省農薬園でも、過去の作業歴を見ていくと色々なものが入れられているのが解ります。綿実殻、鶏糞肥料、混合肥料、堆肥、ほだ木廃木。

ほだ木とは、シイタケの栽培に使われているものです。里山のなかを歩いていると、林の中に1m位の丸太を逆Vの字に組んでいるのが見られますがそれがそうです。今年の6月、京都府美山町の芦生というところでこのほだ木をイヤと言うほど扱ってきましたので、少しその話をしましょう。ただし記憶を頼りに書いているので、嘘を書いても知りません。

シイタケのほだ木と入っても、シイの木を使うわけではありません。別に広葉樹ならなんでもいいみたいです。切り出された丸太にまず穴を空けそこに菌を植え付けたコマ（ほぞみたいなものです。）を打ち込みます。と、ここまででは実際にやったわけではないので良く知らないのですが。この時、打ち込み忘れた穴が残るとそこから雑菌が入って駄目なのだと思います。どうせ菌なのだし、地面におくんだからかわらないじゃないかとか思うのですが。

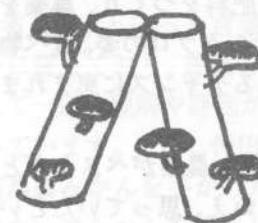
林の中のなるべく平らなところを下草を刈ってきれいにし、この状態の丸太を、漢字の「冊」という字みたいな形に組んでいきます。これがなかなか重労働。そして直射日光があたらないように上に木の枝などを乗せます。こうして1年ほど寝かせておくのです。1年おいておく間に、表皮の下に菌糸が広がり、キノコが生える条件が整います。

菌糸が広がったら、逆Vの字に組み換えます。この状態でキノコが生えてきます。コマを打ち込んだところから生えるのかと

思っていましたが、そんなことはないようです。ほだ木は2年に1回上下を入れ替えて組み換えます。こうして5年くらい収穫ができるのだそうです。

シイタケのほだ木は、逆Vの字に組みますが、なめこは地面にゴロゴロ転がしておきます。最近、井桁に組んでいるのを見ましたが、あれは一体なんでしょうか。

すっかり養分を失ったほだ木は土に帰り養分となります。みかん山の土をつくっているほだ木も、このような長いサイクルの果てにここにやってきたのですね。



言うこと、すること

仁連木克典

省 農薬ミカンの味はいかがでしたでしょうか？初めてお口にされた方はどのような感想をお持ちでしょうか？皆さんはどういう理由でこのミカンをお買い求め頂けたのでしょうか？「省」農薬だからですか？美味しいだからですか？どなたかに勧められたからですか？

私が初めて省農薬ミカンを食べたのは、1990年のことです。ミカン山に行って、農薬ゼミで、無農薬実験田で、お百姓さんの畑で、集会や勉強会で、農業のこと、農薬のことを色々見聞きし、体験してきました。毎年違う天候のなかで行われる農業。農薬の偉大なる能力と、怖さ。口先ではなく、きつても痛くても体を動かしての仕事。一家の生活を背負うという責任。作物の顔色を見て、土や肥料をつくり、農薬を使うポイントを見計らうプロの姿。食べ物を育てる世界にふれるチャンスに恵まれました。

それまで私は、「無」農薬がベストだと思っていました。いいえ、思っていたというより、そんなイメージを持っていただけでした。食べ物の姿の奥にあるたくさんのことを考えるだけの、想像力に欠けていました。農薬ゼミに参加してしばらくたっても、「無」農薬ミカンだと思っていたほどです。こんな鈍な人間ですので、「省」という言葉に込められたたくさんの意味のふくらみを身を持って感じることが出来ているのかどうか、7年目を迎えた現在でも自信がありません。

これからは「共生」「共存」の時代と言われています。相手のこと、他の人のこと、まわりの世界のことを思いやる豊かな優しき想像力が、大切になってくるのでしょうか。今、皮を剥いているミカン、そのひと

つひとつミカンにも実は多くのもの、人が繋がっています。ここは是非皆さん、ほおばったミカンの奥の世界に、豊かな想像力をふくらませてみて下さい。

また、私自身を振り返ってみると、この数年省農薬運動に関わって、「農薬は減らせる」というメッセージをグループの一員として社会に発信したり、友人に話したりするのに、実際自分が食べる物はといえば、面倒だから、便利だからと言い訳をしながら、省農薬どころか、食品添加物オンパレードの出来合いの物を一つ一つ買ってしまいます。有機農法、省農薬、減農薬栽培の拡大のため、そして自分のために、と思って有機農産物を扱う店の会員になり、食材はなるべくそこで揃えるようにしていました。

ま、このようなことで深刻になっていたら、自分を責める気持ちからくるストレスの方が、体に取り込んだ化学物質よりも健康にダメージを及ぼしますから、うじうじ考え込むことはありません。けれども口に出す言葉と実際にとる行動とを一致させたいと思います。「言うは易し、行なうは難し」とは言いますが、「発言よりはむしろ行動で説得できる人間になるぞ」そう思いながら、今年もまたミカンをぱくぱく食べるのであります。

私にとってのみかん山

原山浩介

私が初めて農薬ゼミのみかん山に足を運んだのは、昨年の2月でした。そしてその時が、私がみかん山に関わる皆さんと初めて顔をあわせた時でもありました。

当時、横浜市立大学の2年生だった私は、社会学のゼミナールに身を置きながら、農業や農村、あるいは環境問題といったことを考えようとしていました。私は、狭義の「生産性」や「生产力」に律せられた生産の在り方、ひいては人間関係の在り方や社会全体の進み方といったものに、えも言われぬ危機感を覚えていました。私にとって、農村・農業・環境といった事柄は、その狭義の「生産性」ということの対極にあるものでした。

私が高校時代の友人から農薬ゼミの話を聞いたのは、ちょうどそんな事が頭の中をぐるぐるまわっている、全く以って煮え切らない時でした。煮え切らないながらも持ち前の傲慢さは健在で、その時考えたことはというと、「いったい農学部の理科系の人達はどうやってこういった問題にアプローチするのだろう。」……今思うと冷や汗が出てしまします。

ちなみに、この点についての私の解釈は、農薬ゼミに関わっている人達は、表立って口にはしないながらも、私と似た問題意識をどこかに抱えながら、農薬ゼミで学び、みかんの木の調査をやり、みかん山で酒を飲んでいるんだ、ということでした。そして、いつしか農薬ゼミの名簿に自分の名前が載るようになった頃には、私も同じような気持ちで……半ば自分の問題意識と対峙するために、そして半ば農薬ゼミに関わる皆さんの人柄に魅せられて、みかん山や石田研究室に足を運ぶようになって

いました。

恥ずかしながら、私自身の「漠然とした考えが頭のなかをぐるぐる回っている」という煮え切らない状況は依然として変わらず、むしろ問題の煩わしさゆえに忘れてなくなることが少なくありません。しかし石田研究室やみかん山に足を運ぶたびに、この忘れそくなっていた初心を思い出させられ、それを何とかうまい言葉にしたいという気持ちに駆られます。

☆ ☆ ☆

先日、農薬ゼミの報告書出版記念パーティーに出席した折、改めて、農薬ゼミのこれまでの蓄積の意味を感じました。この蓄積というのは、調査結果そのものの蓄積ということもあります、もうひとつ忘れてはならないのは、これまでみかん山に関わってきた100人を超える人達が、そしてそのみかんを食べて来た数え切れない人達が、省農薬みかんということに託してきた想いの蓄積です。今でこそ、「無農薬」だと「省農薬」といった言葉がスーパーのチラシに躍っており、農薬を使わないことに對して一定の理解や評価が得られるようになっています。しかし仲田さんや石田先生が省農薬みかんを手がけた当初、「農薬を使わないでみかんを作る」ということの道のりは、今の私たちの想像を絶する困難を伴うものだったはずです。このお二人を初め、今の省農薬みかん園を築いてきた多くの人達が胸に秘めてきた熱い想い、その積み重ねをどう受け止め、どう発展させていくかということこそが、私たち若い世代に課せられた課題だと思っています。

先人が省農薬みかんに込めた想いをかみしめ、その魂を自分がどうやって受け継ぐかを考えながら、今年も農薬ゼミのみかんをほおばりたいと思います。



ミカン山での1年

所啓子

私が初めてミカン山に行ったのは、3回生の時でした。秋の調査でした。それから、毎回ミカン山へ行き、1年が過ぎました。

最初はゼミでの白熱した議論に圧倒され、ミカン山へは本来の目的であるはずの調査よりも、むしろ、ご飯をつくったり、おしゃべりしたり、夜のドライブが楽しみでした。

今でも、環境問題とか、ミカン山のこととかに対して、自分の考えというものをきちんと言葉にはできないんだけれど、1年過ぎてみて、その裏にある思い、というものを感じるようになりました。思い、感情、気持ち、といったものです。環境問題というのは、決して、正しい、とか、よい、とかっていう基準だけで取り組むものでなく、取り組む人の思いによって取り組まれるのだ、と気づきました。

だから、あの省農薬園の1コ1コのミカンには、それだけの重みを感じてしまうのです。松本さんや仲田さん、先生や、たくさんの人々の思いが入り交じって、できあがっているミカンなんだなあと思うのです。



もっと大人になりたいな

碓井彰子

調査 査園でみかんを投げ、キウイの棚の下で深呼吸し、満天の星の下で美味しいお酒を飲みながら熱く語らう、ただそれだけが楽しみで参加していたみかん山も(ちゃんと調査もしています)、私が初めて悟の家に来てから3年が経ちました。

末っ子である私はいつでも誰かに引っ張ってきてもらっていました。みかん山も例外ではなく、いつも先輩に連れてきてもらっていました。出発の準備だけをして待っていたのです。「このままじゃダメダメ星人になってしまう！」と悩んでいた1回生の冬に私は地震に遭いました。地震に遭ったこと、その事自体はあまりにも不運で不幸な出来事でした。だけど、私これを機会に変わりたかったのです。「地震に遭ってから、あきべちゃん(私のことです)変わったな、しっかりしてきたな。」と言われたくてがむしゃらに頑張りました(どんな事をしてきたかは内緒ね)。今でも先輩方に叱られてばっかりだけど、それでもみかん山にまでみんなを連れて行って、神戸の販売に関しては責任を持ってできるようになりました。

「ニュースレターの原稿を書いて下さい。」こんな依頼を受けたとき、私はちょっとうれしかったのです。何となく「神戸のみかんの民」として認められたような気がして。古いニュースレターを引っぱり出していろいろ書いてみたけれど、やっぱり皆さん様には上手に書けませんでした。私がみかん山を語るにはまだまだ勉強が必要みたい。

もう、私は若手ではありません(ううつ、ちょっと悲しい)。私には農業に関する専門知識も直感もありません。お料理が上手なわけでもないし、野花の名前や星

座も知りません。だけど、私と一緒に参加した人が「ああ、来てよかったな。また来たいな。」と言ってくれるだけで私は幸せです。そして、今、みかんをむきながらここを読んで下さっているあなたが、「こんな人たちに囲まれて育ったみかんか~。」とちょっとでも思ってもらえたなら、私はもっと幸せです。

ないものだったのですが、みかん農家の皆さん、これとは比べものにならないようないへんな作業を、何十年にもわたって続けてこられるのですから、本当にすごいと思います。

作業が終われば、食事の準備です。「何ができるの？」なんて言いながら、みんなでワイワイ、賑やかに作る食事はとても楽しいし、普段の何十倍もおいしく感じられます。火を囲み、おいしいお酒を飲みながら、楽しい話に大笑いしたり、真面目な話に考えさせられたりして夜更かしするのも、みかん山での楽しみのひとつです。(「おいしいお酒」が楽しみのメインなんじゃないですか?」なんてつっこまれそうですが...)。こんなふうに、みかん山に集まるひととふれあうこと、私を元気にしてくれます。ここで出会う人は、皆さんが、それぞれに違ったいい味を持ち、自分の気持ちに正直に、自然に、生きている。そんなふうに感じることが多いです。肩肘をはらずにひととの出会いを楽しみ、その暖かさにふれるうちに、私のこころは満たされ、元気になっていきます。きっといろんな人から少しづつ元気を分けてもらっているのでしょうか。

私にとってみかん山は、素直な自分のまゝ、人や自然と深く係わって元気になるところであり、そこが魅力なのだと思います。ここで暖かい人達のたくさんの“思い”を受けて育ったみかんは、きっと人のこころを元気にする、お日さまのような味がするのではないか。どんなみかんが届くのか、いまからとても楽しみです。

みかん山の魅力～初心者編

森裕美

私は他大学で心理学を専攻しており、省農薬みかんとは直接関係のない生活を送っています。今年の春、縁あってみかんのお花見に参加させていただいて以来、すっかりみかん山が気に入ってしまい、みかんの栽培や農薬のことはほとんどわかっていないのにもかかわらず、夏・秋の調査にも参加させていただきました。このように、みかん山初心者の私ですが、初心者の目から見たみかん山の魅力について、書いてみようと思います。

一ここに来ると、元気になるなあ。一みかん山に行くたびに、こう感じます。いのちを実感させてくれるみかんの木々や、山の草木。作業が終わって腰をのばしたとき、目の前に広がるやさしい色の夕焼け。暗い山道を照らす月明かり。広い夜空一面に輝く星々。みかん山にいると、虫さえも愛しくなってしまうから、不思議です。普段、自然と切り離された生活を送っているせいか、たくさんの自然に囲まれると、気持ちがワクワクし、嬉しくなってしまうのです。私が今までに参加させていただいた作業や調査は、初心者ということでお、短時間の、内容的にもそれほどきつく

こたつとみかん

金沢英樹

この数年間、あまりみかんを食べてない。中学生の頃には冬になるとよくみかんを食べたものだ。こたつに入ってみかんを食べる、という風景が日本の冬の過ごし方としてよく描かれたりもするが、僕の家はまさにそのような冬の過ごし方をしていた。ときにはみかんの食べすぎて手が黄色になったこともある。(それでも、みかんを食べすぎて手が黄色になるのはなぜなのだろうか。ただ単に手の表面にみかんの皮の色がついただけなのだろうか、それとも体の内側から黄色くなってしまうのだろうか。)

みかんの味にはいろいろあるのだろうが、大別してだいたい次の三つに分けられると思う。

- ①甘いみかん
- ②すっぱいみかん
- ③甘くもすっぱくもないみかん

③のみかんを好む人は当然ほとんどないであろう。また②のすっぱいみかんを好む人も少ないのであるが、皆無であるということもないであろう。実際僕は、甘いみかんよりもすっぱいみかんの方が断然好きである。みかんは柑橘類であるのだから、すっぱくなければおいしくない、と僕は思うのだが、僕の周りの人（家族、友人など）は皆、甘いみかんを好んでいて、すっぱいみかんが好きだという僕のことを不思議がる。

甘いみかん、と一口にいっても、酸味が全くないわけではない。また、すっぱいみかんも甘みが全くないわけでもない。今回の調査（11月上旬頃）で食べたみかんはすっぱかった。これからみかんの味は少しずつ甘くなっていくのだが、それは、酸味が徐々にぬけていくためだそうである。

今、僕の部屋にこたつはない。よってこたつに入ってみかんを食べることはできないが、それでも、久しぶりにみかんとともに冬をすごしてみようかと思う。

最近思うこと（と編集後記）

高杉晋一郎

最近自分がいかにものを知らないかということを以前にも増して感じます。大学に入ってもうすでに7ヶ月になりますが、このたった7ヶ月の間に多くのことを人に教えてもらったり、自分自身で学んだりしました。高校の時までとは全く違う、とはいってもどう違うのかはうまく言えないのですが、そんなことを学んだときには少し賢くなった自分を嬉しく思うことがあります。みかん山で学んだこと、農薬ゼミで学んだこと、そしてそれらを通して学んだことが自分にとってとても大切なことのように思います。

今回このニュースレターの編集をやらせてもらいました。編集という作業を一人でやるのは初めてで、多くの方々の助けを借りて今やっと終えようとしています。至らなかった点も多いかとは思いますが、自分自身で編集したのでとても思い入れの深いものとなりました。省農薬みかんを買っていただく方に少しでも面白かった、ためになったと思っていただければ幸いです。

今年の農薬ゼミの活動

相川創

今年、農薬ゼミの20年近くに渡る調査の結果が1冊の報告書としてまとめられました。その中で、省農薬園は一般の慣行園と比べて、約30%の減収になっていることが報告されています。

この30%の減収は、本当に農薬を減らしたことによる病害虫の影響なのでしょうか。実は省農薬園は標高などの立地条件や、土壌の条件がもともと悪いところなのかもしれません。今年の調査では省農薬園の周りの慣行園と直接比較することで、これを明らかにしようと思いました。そこで省農薬園や、周囲の慣行園の土壌や収量の調査を行ってきました。

普段のゼミでは、今年は特に一貫したテーマは持たず、持ち回りで様々なテーマを扱っています。

1996年農薬ゼミ主な活動

2月 23～25日	剪定ツアーリポート
3月 9日	報告会「省農薬って何だろう」
5月 24～26日	ミカン花見
6月 14日	嘉田良平さん講演会「環境保全型農業と農薬」
6月 28日	梶田劭さん講演会「工業社会の行方」
7月 26～29日	夏の調査
9月 5日	出版記念パーティー
11月 1～4日	秋の調査
11月 29～12月 1日	収穫
12月 7～8日	ミカン配達

「省農薬ミカン」17年の記録

和歌山の農家と京大セミ 採算される

日本有数のミカン栽培地、和歌山県海南市下津町の農家で行われている「省農薬ミカン作り」の17年間の記録がまとめた。研究者たちが協力して実施したもので、農薬で害虫を殺さなくても云々で述べさせ、外見より品質や安全性を求める消費者と連携すれば、農業も確実に経営ができることが示された。【吉野 明】

「外見より安全」訴え

農業によるアグロ化は世界的な問題を集めているが、農業を減らす農法の確立がなかなか難しい。そこで、農業を含めたワシントンミカン栽培規格(省農薬)で起きる病害や害虫、被害の発生状況を監査し、品質の可能性を科学的に明らかにしようとした。小規模な実験地ではなく、実際に農業が生計としている果樹園を対象に、農業收入を確保しつつ省農薬ミカン作りを行った。

ミカン園は畠高20mの山腹の0.5ha。同町大蔵の農業、作田秀樹さん(57)が17年に開墾、500株植え、8年から畠内全生産を行っている。中田さんは87年に農業高校生のいのを開始中で亡くなったことから、できるだけ農業をして継続しようと決心。京大農学部の石田和厚助教授や学生、市民たちから成る京大農業ゼミが省農薬ミカン作りに協力した。

耕種栽培地で作られたミカン

した。これらの害虫バチはカイガラムシに寄生して卵を産み、体内で成長して死んでしまう。その結果は2年經過して表れ、カイガラムシの被害はほとんどない。その他の、害虫も天敵も、さく少い密度で共生。しかし、被害範囲は許容水準以下に収まっ

た。有効な方法のない害虫。ゴマダラミミキには、また、害虫駆除薬を用いて、そこに有効成分が付着する「現段階防除」で効率を上げた。ただし、枯死木や病害に対しては有効性を認めた。

監査は一般園よりも約60%の成績になった。しかし、農業都市の特質で農業地が点状になることを考えると、近づき、近づけ、そして安全性という省農薬栽培の利点が、派生効果をカバーできると結論している。

監査での問題は品質(外見)だった。緑色の開拓、使用は本来、果樹生産の確保と安定のためのもの。先見の良さを認識するためにも使用されている。特に見栄えを要求される新芽ではその傾向が強かった。

監査の問題は品質(外見)だった。

緑色の開拓、使用は本来、

果樹生産の確保と安定のための

もの。先見の良さを認識するため

にも使用されている。特に見栄え

を要求される新芽ではその傾向が

省農薬ミカン栽培20年

和歌山の農家、おいの死きっかけに



害虫とも共生、被害少なく

安全志向高い消費者に



11

紙面

19 29議員は内職?! 失業手当

117 117 省農薬ミカン、栽培続けて20年

アサヒコロ



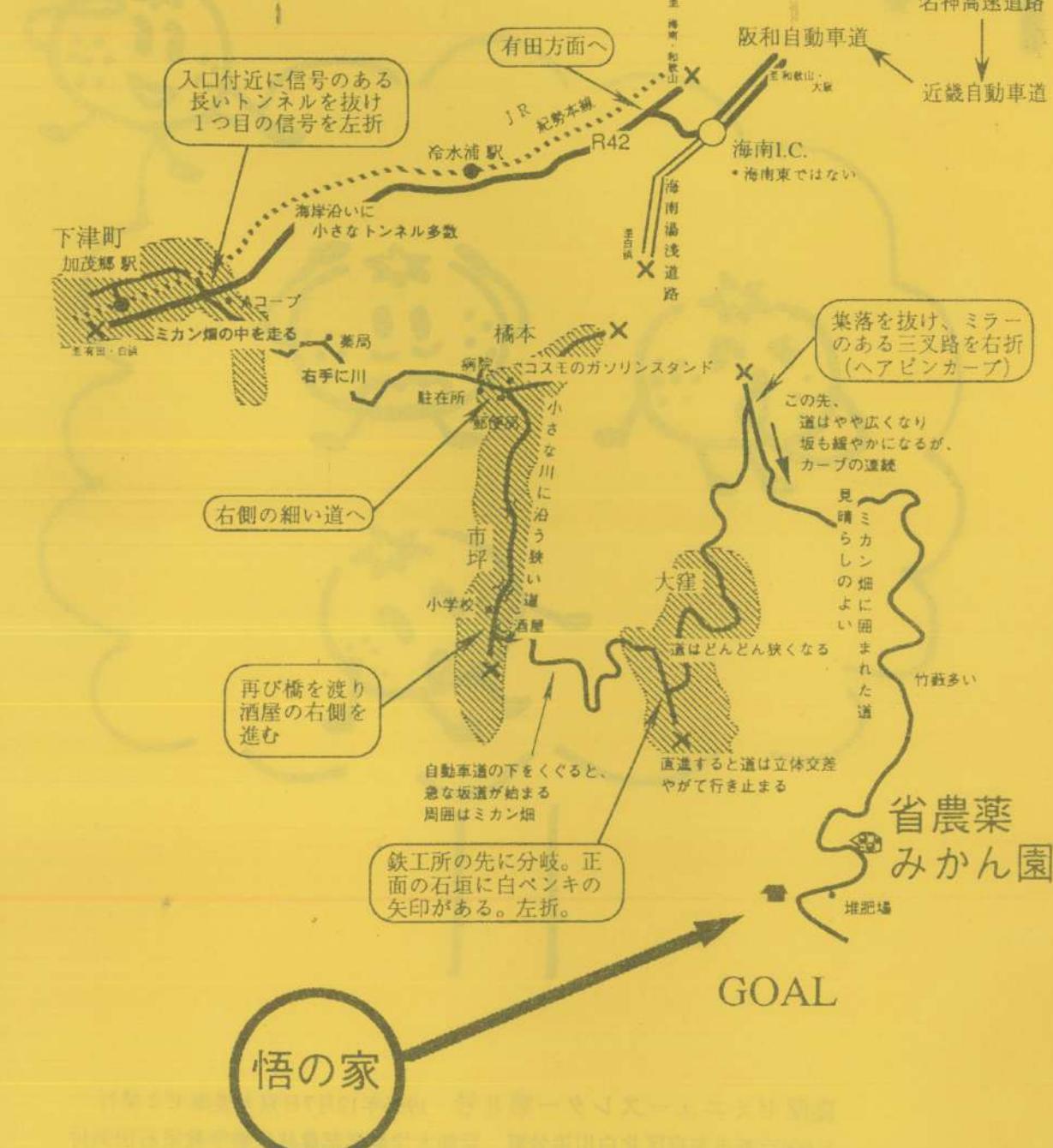
省農薬みかん園・悟の家へのご案内

START

名神高速道路

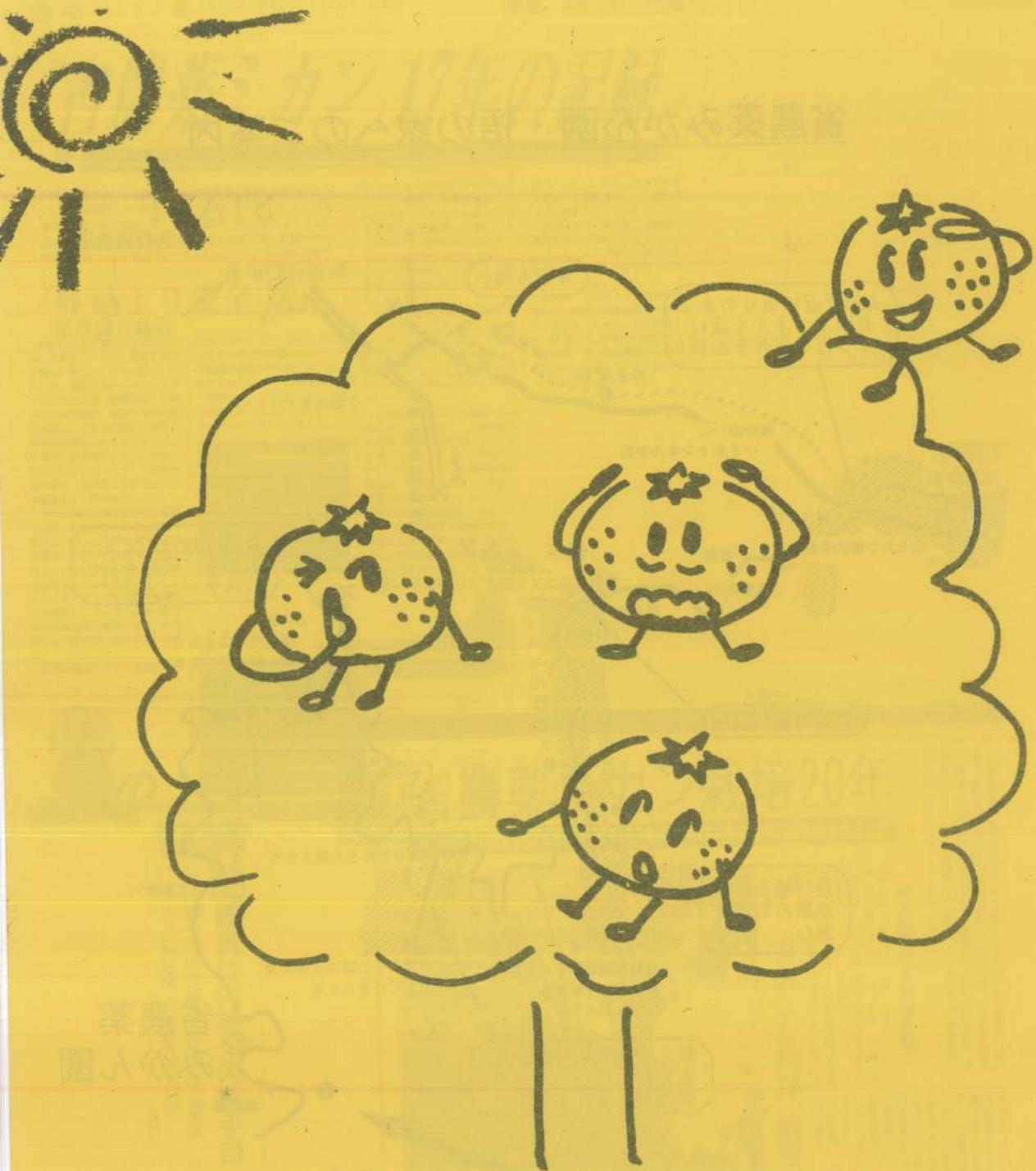
阪和自動車道

近畿自動車道



GOAL

悟の家



農薬ゼミニュースレター第8号 1996年12月7日京大農薬ゼミ発行
〒606京都市左京区北白川追分町 京都大学農学部農林生物学教室石田氣付
Tel (Fax) ; 075-753-6133
E-mail ; kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp
URL ; <http://dicc.kais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP/homepage.html>